

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Field Notes on Fishing Activities in Limau Vellage, North Halmahera

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大胡, 修 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004575">https://doi.org/10.15021/00004575</a>

# Limau 村 の 漁 撈 活 動

—ハルマヘラ調査ノート—

大 胡 修\*

Field Notes on Fishing Activities in Limau Village, North Halmahera

Osamu Ogo

This report describes the fishing activities of the Galelan people of North Halmahera. The data were collected from September to November, 1976, when the author conducted fieldwork in Limau Village. Observations were made from two different perspectives; (1) the relationship between fishing gear and techniques, and (2) utilization of traditional canoes in social activities.

1) Fishing. In general, fishing is of secondary importance in the of subsistence economy, the people mainly depending on sago and several kinds of root crops, including banana and yam. Fishing activities shift seasonally according to the migration and associated behavior of fish. Several fishing techniques are employed, including handline (*pa hau*), longline (*pa lia*), rod and line (*pa totobe*), scoop net (*pa siu*), gill net (*pa soma bodo*), fish trap (*igi*), and fish hedges (*sero*). Handline fishing is the most important subsistence pursuit. Fish traps and fish hedges seem to have been introduced from Sulawesi by migrants. The other techniques appear to be indigenous to Limau.

2) Canoe. All canoes in Limau are of the double outrigger type. They are used now for fishing activities and formerly also for local transportation. Thus can be classified into two types; small dugouts (*awa*) and medium size dugouts (*bolotu*), and large, plank canoes (*pakata*). A particular type of canoe is used with specific fishing techniques. The *awa* and *bolotu* are used for handline, longline, rod and line, gill net, and the *pakata* is used only with the scoop net.

---

\* 国立民族学博物館第1研究部

はじめに	5) 漁獲量と分配・消費
I. Limau 村の漁撈活動	6) 漁具の悉皆調査より
1. 漁業の概要	II. カヌー
2. 漁具・漁法からみた漁撈活動	1. Limau 村のカヌーの構造
1) 釣り漁 <i>pa hau</i>	2. 伝統的カヌー： <i>juanga</i>
2) 突刺し漁 <i>pa tudu</i>	3. カヌーの種類と使い分け
3) 網漁 <i>pa soma</i>	おわりに
4) その他の漁法—— <i>igi, sera</i> ——	

## はじめに

筆者は、1976年9月から12月までの約4カ月間、インドネシア共和国のハルマヘラ島での共同調査に参加する機会を得た。今回の調査は、共同研究「ハルマヘラ島における農耕文化と言語の諸類型の調査」（昭和51年度文部省科学研究費補助金：海外学術調査、研究代表者：石毛直道国立民族学博物館助教授）のメンバーの一員として参加したものであった。この報告は、筆者の研究分担課題の「ハルマヘラ島の漁業に関する民族誌的調査」に関するものである。ここで、その記述に入る前に以下で扱う資料について若干触れておきたい。

まず、この資料が1976年9月30日から12月9日まで滞在した Limau 村（行政上は Kabupaten Maluku Utara Tingkat II, Kacamatan Galela に属している）で得たものであることを断っておかねばならない。つまり、以下での報告はハルマヘラ島全域の漁撈活動に関するものではなく、あくまで Limau 村という小村のひとつの事例にすぎないという点である。

ハルマヘラ島は、ほぼ赤道直下に位置するインドネシア共和国の東端の島であるが、ほとんど全島が熱帯降雨林地帯であり、人びとの居住地域は大体海岸線に集中している。生業活動は、焼畑での陸稲耕作、マニオック、サツマイモなどの根裁類の栽培、サゴ澱粉の製造を中心に、若干地域では沿岸での漁撈活動もおこなっている。これらの点を考慮すると、Limau 村における焼畑根裁農耕、若干の漁撈活動などはほぼ全島的に共通した生業形態であるといえる。

さて、村での調査にあたっては調査が短期間であったため、漁具と漁法との関連を中心とした物質文化的側面からの調査にとめた。とりわけ漁具については全戸にわたる悉皆調査をおこない、その数量的な把握と漁法との関連を調べた。また、漁法については乗船調査によって具体的な漁具の使い分けを観察した。さらに、調査期間中

10月と11月のそれぞれ1週間の漁獲量，出漁回数などを調べた。

なおインフォーマントとの面接調査では，すべてインドネシア語を使用した。魚名，漁具名，漁法などの名称語彙は現地語である Galela 語によって採集した。また，Galela 語名称の表記は現代インドネシア語の表記法を採用した。

## I . Limau 村の漁撈活動

### 1. 漁業の概要

Limau 村は，41世帯・246人（1976年10月現在）からなるハルマヘラ島北部の東海岸に位置する小村である。居住地域も海岸線に沿っており，背後にサゴ林と焼畑をもち，それらを中心とした農耕が生業の主体となっている。他方，村の前面に広がる海域も大切な生産活動の場となり，小規模であるが漁撈活動をおこなっている。村の概要についてはすでに石毛の報告があるので，以下では漁業についてのみ述べることにする [石毛 1978]。

現在おこなわれている漁法は，釣り漁 *pa hau* (Galela 語名称，以下同じ)，網漁 *pa soma*，突刺し漁 *pa tudu* であるが，その他建干簀漁 *sero*，釜漁 *igi* などの漁法も若干の村人によって伝えられている。

釣り漁には，手釣り *pa hau*，竿釣り *pa totobe*，延縄 *pa lia* が，また網漁には叉手網漁 *pa siu*，浮刺し網漁 *pa soma bodo* の区別がみられる。これらのなかでもっとも盛んにおこなわれているのが手釣り漁である。また，延縄，突刺し漁も季節によってひんばんにおこなう。他方，叉手網漁は主に群をなしてやってくる季節的回遊魚を対象とした漁法である。手釣り漁が多いのは，それが釣り糸（ナイロン製）*nilon* と釣り針 *gumala* さえあれば簡単にできるからである。それに，この手釣り漁には難しい技術や複雑な漁具を必要としない。一方，釜漁や建干簀漁はこの村の伝統的な漁法ではなく，他地域からの移住者によってもたらされたと伝えられている。表1は，滞在確認しえた魚名の一覧である。

漁獲した魚は，一部の燻製魚を毎週木曜に Soasio でひらかれる朝市で売るほかはすべて自家食料として消費される。Soasio は Kacamatan Galela の所在地で Galela 地区の中心となっている。Liman 村から船外機付きの船で約一時間ほどの距離にある。

Soasio から Limau 村にかけての海岸はゆるやかに湾曲した砂浜が続き，その間に Galela 族の村落が点在している。村人の説明によれば，彼らの漁場は Gilitopa

表1 主な漁獲対象魚と漁法

ガレラ語名	インドネシア語名称	学名	釣り漁			網漁		突刺し網	建干黄漁	筌漁
			手釣り	竿釣り	延縄	叉手網	浮刺網			
bobara baramahe lasi suru	bobara selar talang	Carangidae (アジ科) <i>Alectis ciliaris</i> (BLOCH) <i>Caranx sp.</i> <i>Chorinemus sp.</i> <i>Elagatis bipinnulata</i> (QUOY et GAIMARD)	○	○				○		
		Priacanthidae (キントキダイ科) <i>Priacanthus sp.</i>	○				○	○		
ngangadike		Exocoetidae (トビウオ科) <i>Pareoxocetus sp.</i>				○		○		
toni	ikan terbang	Mugilidae (ボラ科) <i>Mugilcephalus sp.</i>					○	○		
ruo	belanak	Scombridae (サバ科) <i>Euthynnus affinis yaito</i> (KISHINOUE)	○		○					
leanga	komo	<i>Thunnus alalunga</i> (BONNATERRE) <i>Katsuwonus pelamis</i> (LINNÉ) <i>Rastrelliger sp.</i>	○				○	○		
tolouro ido supado	cakalan kembung	Nemipteridae (イトヨリ科) <i>Nemipterus sp.</i>	○	○						
ngongare	sunian	Balistidae (モンガラカワハギ科) <i>Balistes sp.</i>	○	○						
kusese	tato	Lutjanidae (フエダイ科) <i>Paracaesio kusakarii</i> ABE	○							
gorobe		Caesionidae (タカサゴ科) <i>Caesio sp.</i> <i>Caesio erythnogaster</i>	○					○		
dolosi cion	pisang <sup>2</sup> ekor kuning	Dasyatidae (アカエイ科) <i>Dasyatis sp.</i>							○	
nyowa	nyowa	Hemiramphidae (サヨリ科) <i>Hemiramphus sp.</i>				○				
ngawaro		Xiphiidae (メカジキ科) <i>Xiphias gladius</i> (LINNÉ)	○							
sapilada	ikan layar	Dussumieridae (ウルメイワシ科) <i>Spratellioides japonicus</i>	○							
make		Sphyrnidae (シュモクザメ科) <i>Sphyraena zygaena</i> (LINNÉ)	○	○					○	
gasango	golago	Loliginidae (ジンドウイカ類) <i>Loligo sp.</i> <i>Loligo sp.</i>	○							
udi udi teto	cumi <sup>2</sup> cum <sup>2</sup>	Serranidae (スズキ科) <i>Plectropoma maculatum</i> (BLOCH)	○							
lodi		<i>Ponaeus sp.</i>						○		
sakiloru		Channidae (タイワンドジョウ科) <i>Ophicephalus sp.</i>							○	○
lebo		Anguillidae (ウナギ科) <i>Anguilla sp.</i>								○
godo		Anabantidae (キノボリウオ科) <i>Anabas scandens</i>							○	
gegete									○	

注1 1976.9.30~11.30までの漁獲のうち同定できた分のみ掲載した。

注2 インドネシア語名称は、インフォーマントの記載に従った。

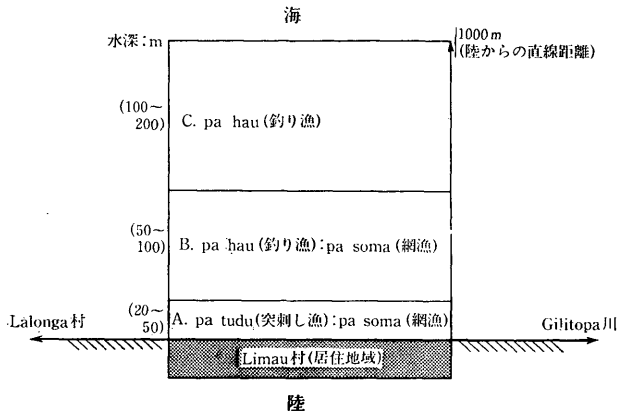


図1 Limau 村の漁場の認識 (村人の漁場の認識を概念化したもの)

川から Wonge (浅瀬) にかけての範囲といわれるが、実際の漁はそれより若干狭い範囲、つまり Limau 村の居住地域の両端から沖合に向けての延長線上の内側が日頃の漁場となっている。大体陸から 500~1000 m ほどの沖合までの範囲である (図1)。Gilitopa 川でもまれに貝 *gumuru* の一種を、主に女性が採集することがある。主たる漁場となっている海域 (図1のC) は、海底の深さが 100~200 m ほどでここでは釣り漁をおこなう。図中のBでは釣り漁のほか網漁もおこなわれる。水深も 50~100 m である。もっとも陸地に近いAでは突刺し漁が中心となり、若干の網漁 (叉手網) もおこなう。ここは水深も 20~50 m と浅い。

ハルマヘラ島の気候は、6月から10月にかけて雨量が少なく南風の吹く季節 *kore sara* と、12月から4月にかけて比較的雨量が多く北風の吹く季節 *kore mie* の2シーズンにわかれている。とはいっても乾期、雨期といえるほど両シーズンに明確な区分があるわけではない。大体、4~5月と11~12月がそれぞれの季節への端境期にあっている。

*kore mie* のときにはサバ科の *supado* [*Rastrelliger sp.*]、サヨリ科の *ngawaro* [*Hemiramphus sp.*] などが漁獲される代表的な魚である。この季節には北の季節風が吹くとともに、毎日雨が続き Gilitopa 川の上流から大量の濁水が海に流れ込み、近海では魚がとれなくなるという。しかし、一方ではこの北風によって前述の季節的回遊魚である *ngawaro* が Galela 湾内にやってくる。この *ngawaro* は叉手網をつかってとるが、村人でもその網を所有しているのは少なく、なおかつ *pakata* とよばれる舟も必要となりこの村で実際におこなっているのは3人にすぎない。また、この叉手網漁は *kore sara* の季節になってハルマヘラ島の中、南部方面へ南下していくのを追って村から離

れて漁をすることもある。

*kore sara* の季節になるとアジ科の *bobara* [*Alectis ciliaris* (BLOCH)], ウルメイワシ科の *make* [*Spratellioides japonicus* (HOUTTUYN)], トビウオ科の *toni* [*Pareoxocetus sp.*], タカサゴ科の *cion* [*Caesio erythrogaster*] など多くの魚がとれる。そのうちもっとも多く漁獲されるのがサバ科の一種で *leanga* [*Euthynnus affinis yaito* (KISHINOUE)] とよばれる季節的回遊魚である。この *leanga* と前述した *ngawaro* が Limau 村の沿岸海域でとれる魚の双壁である。*leanga* はもっぱら手釣りか延縄によってとる。また、この季節になると魚群が海岸線付近まで回遊してくるので、陸に近い海域 (図1のA) で突刺し漁を中心とした漁がおこなわれる。その他、浮刺網を使つての漁法もあるが、普通おこなわれることはまれである。

建干簀漁、筌漁など主として内陸でおこなうものもあるが、両方とも漁具が村に一つしかなく調査期間中 *sero* (建干簀) を使用したのはわずか1回にすぎず、*igi* (筌) は全く使わなかった。村人によれば、それらの漁法はもともと Galela 族にはないものであるという。たしかにその所有者は、いずれも北スラヴェシ (Sangir) からの移住者であった。少なくとも、建干簀漁、筌漁が Limau 村に伝統的な漁法ではないと考えてよさそうである。

さて、Limau 村の社会を特徴づけているものに入びとの移動の激しさをあげることができる。この点に関しては、本号で松澤が指摘しているので詳述はさけるが、そうしたことが村人の漁撈活動、とりわけ *ngawaro* を求めて他地域へ出漁していたこととなんらかの関係があると思われる。たとえば、Limau 村には現在 Wasila 地区 (ハルマヘラ島中部) からの移住者が若干名いるが、この Wasila 地区は後述するように、乾期に入って回遊魚を求めて出漁し、村人が滞在する Lelei 岬 (Limau 村から約 100 km) や Maba 地方と比較的近い距離にある。

Limau 村にみられる転出入の激しさと漁撈活動との関連は、その歴史的過程のなかで明らかにされようがここにはそのための十分な資料がない。

また、漁具や漁法についても移住者によってこの村にもたらされたものも多い。しかしながらここで注目しなければならないのは、移住者による漁具や漁法あるいはその技術が Limau 村の人びとに受容されていないということである。これは、村自体にそれらを受け容れるだけの背景がないからといえよう。つまり、村人にとって漁撈活動はあくまで「おかずとり」にすぎず大規模な、あるいは複雑な漁具を使った漁法よりも、いつでも簡単におこなえる手釣りとか突刺し漁などの方法が利用されやすかったからともいえよう。だから、筌のような手の込んだ漁具を作ったり、設置してから漁獲までに労力を費さねばならない建干簀は必要としなかった。

石毛によれば村人の生活空間の認識には山→低地林→畑→海という区分が明確であり、それらの空間は同時に生業の場ともなっていた[石毛 1978:166-167]。そうした認識によれば、漁撈活動の場は海である。とすれば、釜漁など低地林でおこなわれる漁法は、彼らの漁撈活動の場の認識からはずれていることになる。彼らがそうした漁法をもっていないのは、あるいは彼らの場の認識とかかわりがあるかもしれない。また、現実的には村の前面に広がる海域にサンゴ礁帯がないことも漁法の種類の少なさの一因ともなっている。そしてなにより重要なことは、彼らの生業活動の中心が焼畑での陸稲、根栽類の栽培にあり、食料源の大半をそこで確保できるということである。つまり、彼らにとっては必死になって魚をとらねばならない理由がないのである。

以上、Limau 村の漁業の概要について述べてきた。その結果、数少ない漁撈活動を特色づけているのが手釣りを中心とした沿海域での操業であった。以下では、それぞれの漁法について漁具との関連から触れていきたい。

## 2. 漁具・漁法からみた漁撈活動

### 1) 釣り漁 *pa hau*

釣り漁には手釣り、竿釣り、延縄の3種類がある。しかし、竿釣りがおこなわれることはまれで、手釣り漁が日常的におこなわれる漁法である。



写真1 *pa hau* (手釣り漁)

一般に、村人は1日に2回出漁する。朝方 *i langi*<sup>2</sup> (太陽が出る前にすでに明るくなっている頃) と呼ばれる朝方の5

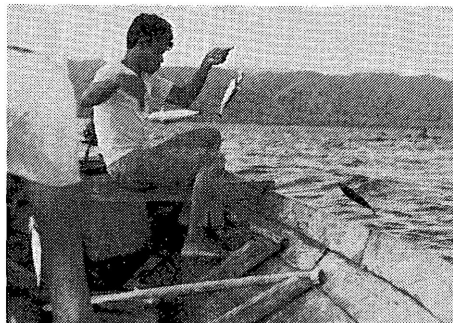


写真2 *pa lia* (延縄)  
釣りあげている魚は *leanga* (サバ科)。





写真3 lau (擬似針) づくり

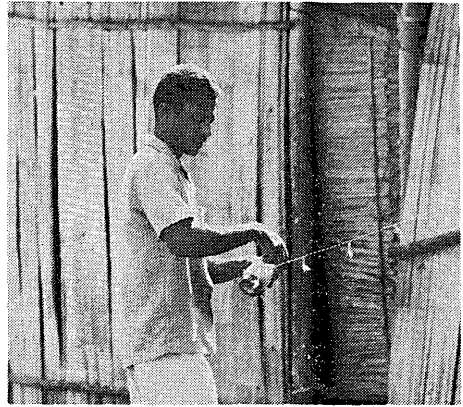


写真4 釣り糸の手入れ  
男性の手にしているものは balim (糸巻具)。

時から8時頃までの時刻（そのときの漁によっては10時頃までになる）と *i mada*<sup>2</sup> と呼ばれる夕方の5時から7時までの時刻のいずれも涼しい時間に出漁する。人によって多少の差はあるが、この出漁回数は大体2～3日の間隔をおく。釣り漁では多種類の魚をとるが、筆者の確認できたものでは35種類あった。そのうち手釣りの対象となったのは19種類であるが、それはあくまで主に手釣りでとるということであって、竿釣りや延縄ではとらないというわけではない。35種類のうち、同定できたのは18種類であった（表1）。そのうち、もっとも多くとれるのが *leanga* で、1回の漁で50～60匹とることもある。*leanga* は季節的回遊魚で *kore sara* のシーズンにやってくる。手釣り・延縄によってとるが、必要な漁具としては釣り針とナイロン糸だけである。ただし延縄の場合、*lau* とよばれる擬似針を使用する。

擬似針は、まずニワトリの羽 *toko ma gogo* を小さく切ったものを釣り針 *gumala* の穴のあいた部分 *ma kope* に通し、羽の根元を折りまげ細い木綿糸でくくる。羽は釣り針よりも長くする。もっとも現在では、ニワトリの羽にかわって包装用のビニール製のヒモ *fuya* を使う場合が多い。その釣り針をナイロン製の釣り糸（約100mほどの長さがある）に10～40cm間隔につけ、糸巻具 *babalin* に巻きつける（写真4）。

釣り針は、現在では Soasio の商店で買ってくるが、大体30個入りの長さ3cmほどの釣り針で300ルピア（約210円）である。かつては針金でつくったといわれる。

後で触れるように、釣り針と釣り糸の太さによる組み合わせで、対象とする魚が大体決まる。

この *lau* を使ってとる魚は、*leanga* の他 *bobara, ido* [*Katsuwonus pelamis* (LINNÉ)] などである。主に延縄 *pa lia* に利用されるが、手釣りでもやっている。延縄の場合、

沖合 1000 m ぐらいのところで, *lau* を海中に流し, ほぼ半径 300 m の円周内を周回する。20分程度の間隔をおいてひきあげ, 多いときで15~20匹ぐらいの漁がある。しかし, この延縄による曳き釣り漁をやる例は少なく, むしろ *lau* を使った手釣りが中心となっている。

## 2) 突刺し漁 *pa tudo*

突刺し漁は, *kore sara* のシーズンによくおこなわれる。このときは海岸線付近まで魚が遊泳してくるためである。したがって漁場も, 水深 10~20 m ぐらいの陸に

近く比較的浅いところが多い。ふつう利用される漁具は *dodofa* とよばれる突刺し具である(図2)。*dodofa* (図2の A, B) は, *ma doto* (鉄の意味) とよばれるヤスの部分(図中 a)と竹製の柄 *tui* (図中 b) からなっている。柄は 3 m ほどあり, 先端部にナイロン糸の手ぐすでヤスがくくりつけられている。ヤスは, *Soa-sio* で鉄を買い, *フィゴ dua<sup>2</sup>* を使ってつくる。ここでは 3 本ヤスを使っており, 先端にはそれぞれかえし *ma gale* がついている。実際に魚をとるときは真中の刃先の長い部分で突き刺す。

他方, すべて木と竹でつくったヤスもあるが, これは北スラヴェシからの移住者のものであった(図3の A, B)。なお図中 A は,

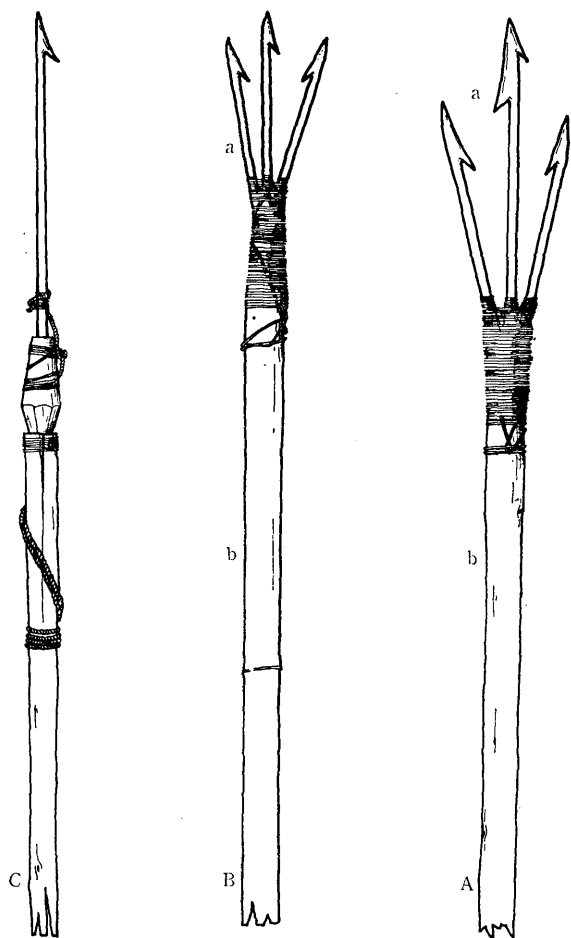


図2 突刺し具① *dodofa* と *titiala*

*dodofa* であるという説明であったが、突刺し具には間違いないにしても、これで果たして魚を突いたのかどうかは問題がある。

その他、図2のCの銛 *titiala*, および図4の弓矢による刺し具 *ngangami* もある。いずれも所有者は1人だけであり、普段、使われることはほとんどないが、*titiala* の方はサメなどの大型魚類を突くときに用いられる。先端部のヤスが柄(4m ぐらいの長さで竹製)に固定されず、魚体に刺すと同時に竿をはずし、ヤスについている糸だけでたぐりよせる。

一方、*ngangami* は、弓 *ma awa* (弦の部分は *dedeli* とよばれる)と矢 *doto* の組み合わせである。また、矢羽はついていない。図中の矢は先端部分が2本 *salara* であるが、他に1本 *sahi* 3本 *toko ma lalata* のものがある。

これら一連の突刺し具を用いての漁は、夜間おこなわれ、日の沈んだ7時以降、プレッシャー・ランプを舟(使用される舟は、*awa, bolotu* とよばれる小型のものである)の先に置く。普通、横板をおきそれにランプを

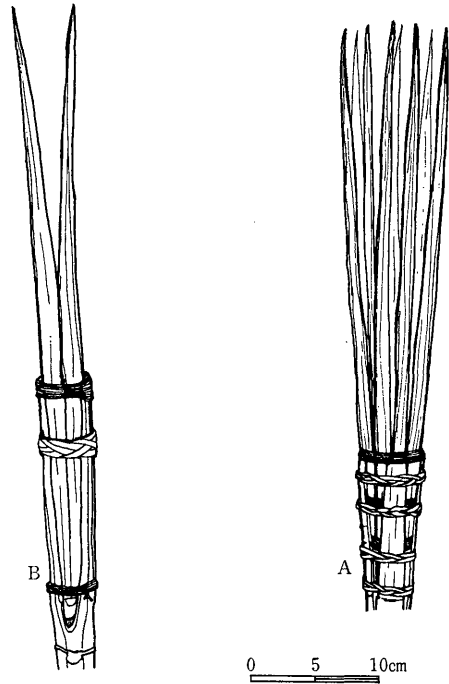


図3 突刺し具(木製)② *dodofa*

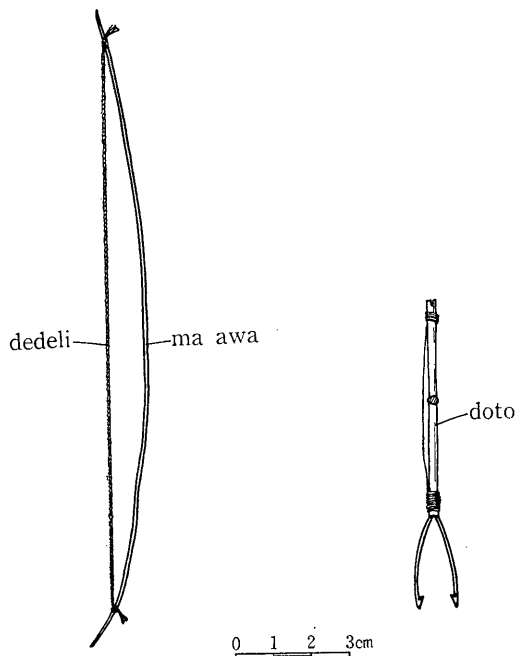


図4 弓漁用の漁具 *ngangami*



写真5 pa tudu (突刺し漁) の出漁

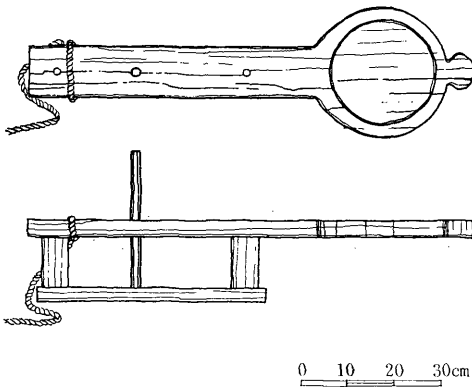


図5 ランプ置台 sionga

くくりつける (写真5)。とくに、*sionga* とよばれるランプ置台をそなえた舟もある (図5)。舟には、突く者 *ma nomaka* と漕ぐ者 *ma rabaka* と2人が乗り組み、突く者はへさきに立ち、近寄ってきた魚を突くわけである。かつて、ランプのないときは、ココヤシの油 *poci longa-longa* をもやして明りにしたといわれる。出漁時間は、

漁のあるなしにかかわらず4時間ほどである。なお、この *dodofa* は手釣りのとき、たぐり寄せた魚を突くときに使われることもある。突刺し漁の対象とする魚は種類も多く、37種類ほどであったが、筆者の確認しえたものは10種類にすぎない。

### 3) 網 漁 *pa soma*

現在、網具としては叉手網 *siu*、浮刺網 *soma bodo*、すくい網 *gogeleba*、*salapa* があるが、*salapa* は *siu* の副漁具として使われているので、種類としては3種類である。そのうち、海で使われるのが *siu* と *soma bodo* である。

**叉手網漁 *pa siu*** この村で唯一大がかりな漁法で、叉手網を使った追い込み漁である。数のうえからみると叉手網の所有者は8名いるが、実際に漁に出ているのは3

名だけである。これは、この叉手網には、普通使っているのとは別の *pakata* とよばれる舟が必要となり、それをもっているのが3名しかいないためである。なお、叉手網を所有している8名のうち、購入したのが4名、交換が2名、父方のオヂなどから譲り受けたのが2名である。そのうちもっとも高価な例が25,000ルピア（約17,500円）、逆にもっとも安価だったのが7,000ルピア（約4,900円）であった。平均すると約17,000ルピア（約11,900円）であり、村人の1カ月の収入が2,500～3,000ルピア（約1,750～2,100円）であることを考えると、かなり高いものとなっている。したがってこの網は誰でも買えるというわけにはいかない。

叉手網漁は *kore mie* のシーズンにおこない、対象とする魚は *ngawaro* とよばれる季節的回遊魚であることはすでに述べた。まず、10～12隻の *pakata* が海岸から300～500m ぐらいのところから群れをなして回遊している *ngawaro* を岸边の方へ追い込む。ただし、村には3隻の *pakata* しかないので、この漁は隣接の Lalonga 村と共同でおこなう。追い込むときには勢子役（子ども）の乗った2隻の小舟が一行横体に並んだ *pakata* の両端から海面を叩いたり、舟をローリングさせたりして魚を岸の方へ誘導する。岸に近づいたら、それまでの一行横体から扇形に隊列を変え、*ngawaro* を包み込むようにする。そのとき勢子役は岸の方から追い込む。*pakata* の船上では、すでに叉手網 *siu* を広げへさきで待機しているが、ころあいを見計らってそれを海中に突っ込み、網のなかに *ngawaro* のはいっているのを確認するとすばやくひきあげ、小さなすくい網 *salapa* ですくいあげる。多いときで1回に60匹くらいはとれる。

叉手網は、袋状をした網の部分と、それを固定させる2本の竹（それぞれ7m ぐらいの長さがある）からなっている。網を広げるとちょうど三角錐の形となり、その

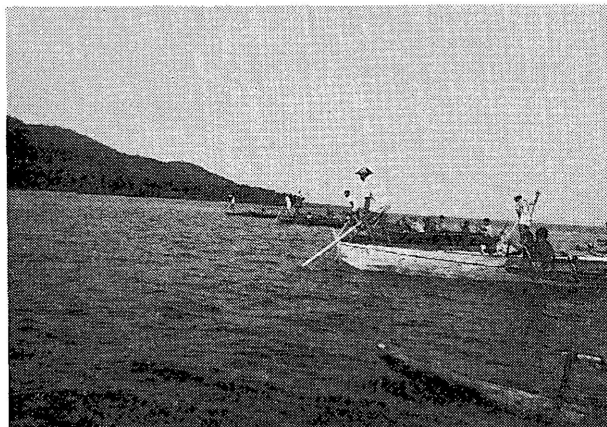


写真6 pa siu（叉手網）による追い込み漁

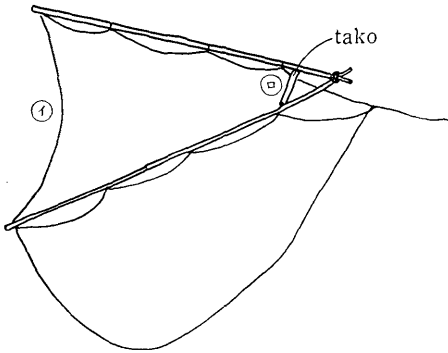


図6 叉手網の模式図

底面①を広げるために、頂点にあたる部分⊕に横ばり *tako* をほどこしている(図6)。網の大きさは、長さが7m、横が6mほどで、網糸は No. 30 もしくは No. 40 (Soasio の商店で売られている) とよばれる中太のものが使われる。

この叉手網漁は、*kore mie* のシーズンのときだけおこなわれるが、ときとして南下する *ngawaro* を追って、Lelei 岬まで出漁することもある(図7)。

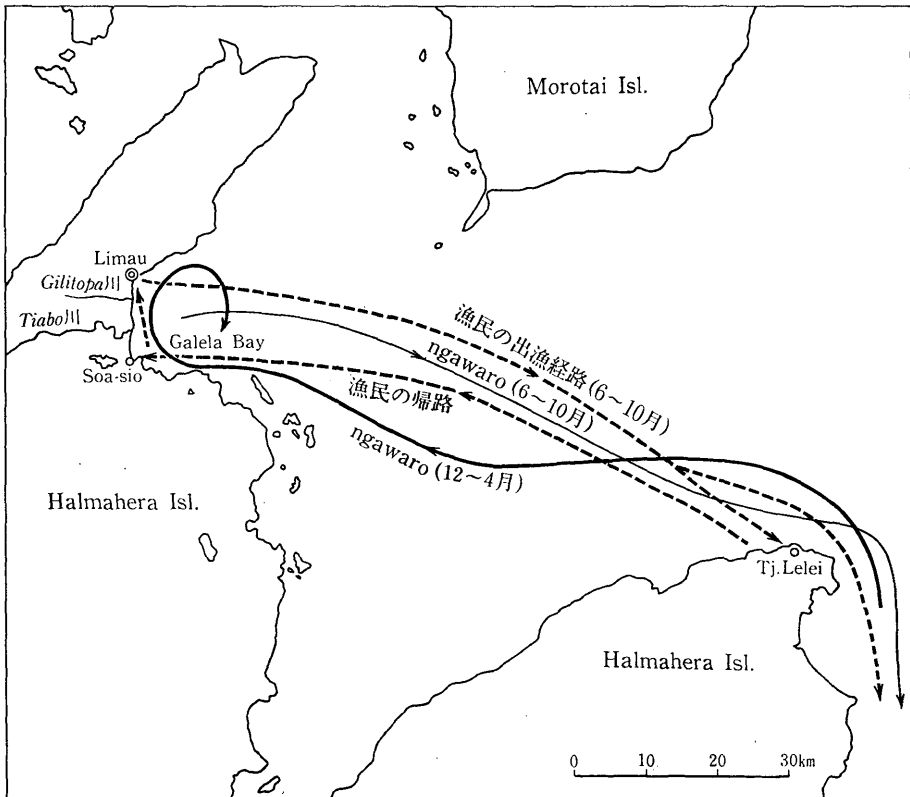


図7 pa siu (叉手網) による遠海域への出漁範囲

\* Director of Military Survey, Ministry of Defence, United of Kingdom [1972] より作成。

最近出漁したのは1974年であった。このときは Lalonga 村からも出漁したが、Limau 村から参加したのは1隻だけであった。それは3カ月におよんだという。航海中、それぞれ役割が決められている。へさきで魚を見つけ、実際に叉手網を扱う者(1人) *ma nomaka o gonge*, 中央で櫂をこぐ者(2人) *ma rabaka i gonge*, 後部で舵をとる者(1人) *wasi dodu ulu* の4人である。なお、村の沿岸などで漁をするときもこのように4人で乗り組むが、そのときは外洋に出るので水のかい出しと料理の手伝いに子どもを1人連れていった。外洋に出るときは、*totangu* とよばれる小屋を船の中央にとりつけ、その中で起居する(写真7)。また、帆走するために *ma side* とよばれる帆を張る。Lelei 岬には4~5日ぐらいでつくが、岬が近づくと帆を下ろし漁の準備にはいる。叉手網の2本の竹は帆を張るのに使っていた竹 *makalutu* を利用する。出漁期間中は岬の海岸付近に簡単な出作り小屋を建て、そこで野営する。Lelei 岬での漁は、朝(6時から8時頃)と夕方(3時から6時頃)の2回おこなう。漁獲した *ngawaro* は一昼夜干し、それを20匹をひとまとめにして *galifea* とよばれる竹製の柵ではさむ(写真8)。この20匹を単位としたものを、*o nawo galifea moi* (“1包みの柵にはいった魚”の意味)とよび、それが2つであれば *o nawo galifea sinoto* (2包みの柵にはいった魚)といったように表現する。これが10個になると *o nawo galifea magiow*(10包みの柵にはいった魚)あるいは *biliku moi* と称され、それ以上は50個を単位として *beke moi* と数える。Soasio の市場で売るときには、1単位(*o nawo galifea moi*)が約200ルピア(約140円)になる。大体、1度の出漁で *beke moi* (1,000尾)ほどになるので20,000ルピア(14,000円)ほどの現金収入となる。沢山とれるとスラ



写真7 *totangu* (pakata 型カヌーの船上につけられる小屋)  
間口1.5 m, 奥行2 m ほどあり、中に10人程度入れる。

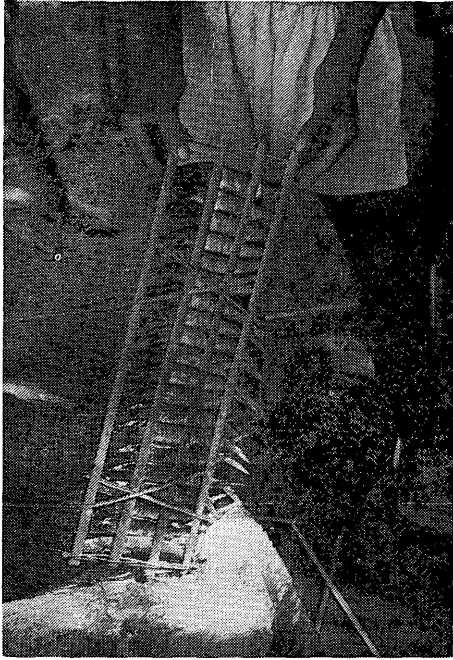


写真8 galifea (野柵)  
20尾を1単位としてつくる。



写真9 pa soma bodo (浮刺網漁)  
使用しているカヌーは pelang 型で  
北スラヴェシ (Sangir) 地方のもの。

ヴェシ方面からも買いにくるという。逆に少ないときには Lelei 岬周辺の村々で売ってくる。いずれにしても叉手網を使った漁法は、何隻もの船と共同でおこなう点で Limau 村でのもっとも大がかりな漁法であるといえよう。

**浮刺網漁 pa soma bodo** これは通常1人でおこなわれる(写真9)。網の長さは30~40mほどで、網の底部には鉛のおもり *ma totu* をつけ、上部に木片の浮子 *ma babao* がつけられる。ナイロン製の網地は日本製のものであった。この浮刺網漁は陸に近い水深20mぐらいの海域でおこなう。方法は夜間に陸側の木の枝に網の端をヒモで結び、もう一方の端にはイカリをつけて舟をつかって網を海上に設置する。そして翌朝ひきあげるわけである。その他、網の両端にイカリをつけ海に流す方法もある。これとる魚は *cion*, *bobara* などで、いずれも *kore sara* の季節に回遊してくる魚である。このように、浮刺網漁は魚が近海までやってこない *kore mie* の季節にはほとんどおこなわず、もっぱら *kore sara* の季節にするという。

#### 4) その他の漁法——*igi, sero*——

これまで触れてきた漁法は、いわば Limau 村の中心的漁法であった。一方、以下



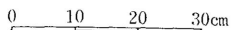
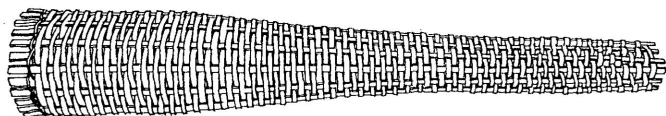


図8 igi (筥) ウナギとりに使用

に登場する筥漁，建干簀漁は，それをおこなう者も少なく，むしろこの村に移住してきた人びとが持ち込んだものようである。

筥漁 *igi* 主にウナギ *godo* [*Anguilla sp.*] とかタイワンドジョウ *lebo* [*Ophicephalus sp.*] などをとるとき用いられる漁法で，河川や沼地などを利用する。使われる漁具は竹を編んだ筥 *igi* である(図8)。図の筥は，Kau (ハルマヘラ島中部) から移住してきた老人が作ったものである。材質は竹で口の内側にはかえし *ma boka* がつけられている。長さは100cmで，かえしの部分は約40cmほどである。また，Kau と近接した地域に住む Maba 族にも *igi* はあるが海で使っている。方法は筥の内側に石をいれて流されないようにし，上に押え木を置いて使用する。

筆者は調査期間中にウナギ捕りに同行する機会をもったが，そのときには筥は全く使わなかった(写真10)。ただし村人は一般にウナギを食用にすることは稀で，またすでに述べたような筥具を使った漁法もやらない。

さて，ウナギ捕りにもっていった道具は大きな山刀 *pela* と太い釣り針だけであった。まず適当な水たまりにわけ入り，山刀で周囲の雑草を切り倒したのちに露出した土をほり起こす。次に手で土中を探り，ウナギのいそうな場所を見つける。一度で見つけることはほとんどなく，場所を移動しながら根気よくそうした動作を繰り返すわけである。ウナギを見つけると，周囲の木々から適当な長さの



写真10 ウナギ捕り  
*igi* (筥) はつかわず，釣り針で突き刺してとる。

枝を切りとり、それでウナギのいる場所の周辺を掘り起こす。やがてウナギのいる場所をはっきりと確認すると、素早く手にもった釣り針をウナギの胴体に突き刺し引張り出す。釣り針にはあらかじめ糸が結びつけられており、たとえウナギが土中にもぐり込んでも糸をたぐりよせてウナギを捕えることができる。これは、むしろつかみ捕りに近い方法であるが、その他、ウナギをみつけると山刀で頭の部分を切り落して捕えることもある。

恐らく、こうした漁法が Limau 村の本来のもので、筌具を利用した漁法はもともとこの地にはなかったように思われる。

**建干簀漁 sero** これは村から約 3km ほど南にいった Gilitopa 川付近の低地林でおこなう。簀建てをするのは干潮時であるが、竹で円筒形をした簀を 2カ所つくり、周囲にサゴ林の葉を利用した誘導壁をつくる。二つの簀にはそれぞれ魚の入口をもうけ、その内側にかえしをつくる。これを作り終えるのにほぼ 3時間かかるが、日中の干潮時に設置する。その後、夜半過ぎの満潮の頃をみはからって魚のかかり具合を見に再びでかける。対象となる魚はキノポリウオ [*Anabas scandens*] などである (写真 11, 12, 13)。

この他の漁法として、潜水漁法 *putun* がある。陸に近いところが漁場となるが、大体 7~8m ぐらいまで潜り、突刺し具 *titalia* を使って魚をとる。この村で水中銃

*singjata* を所有している者が 1名いたが、これは銃座を木でこしらえ、ヤスの部分には鉄の棒を利用したものである。しかし、これも筌漁や建干簀漁と同じように現在ではほとんどおこなわない。

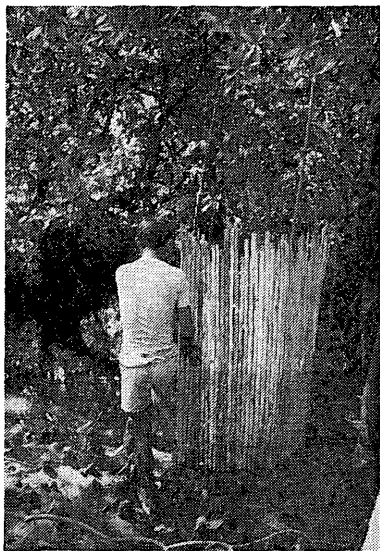


写真11 sero (建干簀漁) ①  
竹製の円筒を立て、かえしをつける。



写真12 sero (建干簀漁) ②  
魚を誘導するための壁づくり。

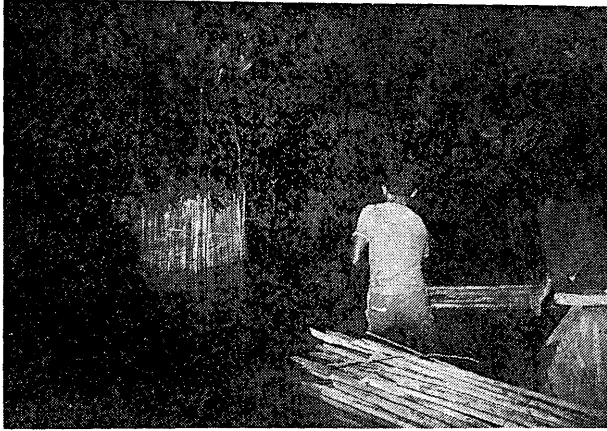


写真13 sero (建干簀漁) ③  
干潮時に仕掛けた sero を夜中(満潮)に様子を  
みにいく。

#### 5) 漁獲量と分配・消費

表2は10月16日～22日と11月20～26日のそれぞれ1週間における魚種別の漁獲量を示したものである。調査にあたっては、任意に選んだ6名の村人が上記期間中にとった魚の数、名称ならびにそのときおこなった漁法を1回の出漁毎に記録したものである。なお、2回にわたる調査にはおよそ1カ月の間隔がある。これは Limau 村に滞在した10月～11月がちょうど *kore sara* から *kore mie* への移行時期にあっていたため、*kore sara* の終る10月中旬と *kore mie* にはいりかけた11月後半を選び、とれる魚種の変化をみようとしたことによる。

すでに述べたようにハルマヘラ島では、明確に乾期と雨期を気候のうえから区分することはむずかしい。しかしながら、すくなくとも両者でとれる魚種についていえば明確な違いがみられる。つまり、*kore sara* のときにとれる *leanga* と *kore mie* のときの *ngawaro* である。いずれも回遊魚でそれぞれのシーズンを代表する魚である。

表2によれば、*leanga* の漁獲量は10月の場合344尾、11月には418尾を記録している。11月に増えているのは、その頃が *kore sara* と *kore mie* との端境期にあっているためと思われる。つまり、完全に *leanga* が Limau 村の近海から姿を消すのは12月頃からであり、11月にはまだかなりの漁獲が可能だからである。一方、*ngawaro* をみると10月はゼロであるのに対し、11月には145尾が記録されている。ただし *ngawaro* をとるのは村全体でもわずか3人であり、表中にはそのうちの2人が含まれている。

表2 漁獲量・魚種・漁法

漁法	計	個人名 ①						魚種	個人名 ②						計	漁法
		Ab	Mo	Ja	Ha	Sa	Al		Ab	Mo	Ja	Ha	Sa	Al		
○	344	76	43	70	65	50	40	leanga	88	38	56	120	62	54	418	○
—	—	—	—	—	—	—	—	ngawaro	—	—	85	—	—	60	145	△
○×	6	—	1	—	—	3	2	ruo	2	—	4	3	2	5	16	○×
○	6	—	3	1	—	2	—	kusese	—	—	4	5	—	3	12	○
○	9	3	—	1	3	2	—	lasi	—	3	—	2	3	3	11	○△
○	12	—	—	3	6	—	3	ngongare	3	—	2	—	1	—	6	○
○	3	—	—	2	—	1	—	cion	1	—	2	—	—	—	3	×
○	10	2	—	3	—	1	4	bobara	—	—	7	—	—	—	7	○
×	1	1	—	—	—	—	—	nyowa	1	—	—	—	—	—	1	×
—	—	—	—	—	—	—	—	lodi	—	—	1	—	1	—	2	○
—	—	—	—	—	—	—	—	ngangadike	2	2	—	—	—	1	5	○
—	—	—	—	—	—	—	—	tolouro	1	1	—	—	—	—	2	○
○×	3	1	2	—	—	—	—	gaca	1	—	1	—	1	—	3	×
×	2	1	1	—	—	—	—	sidoene	2	—	—	—	—	—	2	×
—	—	—	—	—	—	—	—	gasago	3	—	—	—	—	—	3	○
×	1	1	—	—	—	—	—	udi	2	—	—	—	—	—	2	○
×	1	1	—	—	—	—	—	sakiloro	—	—	—	—	—	—	—	—
○	7	1	—	2	—	2	2	turusi	—	—	—	—	—	—	—	—
	405	87	50	82	74	61	51	計	106	44	162	130	70	126	638	

注1 ①, ②は、それぞれ調査期間10/16-22, 11/20-26を示す。

注2 漁法の表記 (○, △, ×) は表3の注参照。

さて、調査期間中にとれた魚獲は確認できたものが18種類であった。そのうち *kore sara* にとれるものは *leanga*, *cion*, *bobara* でいずれもアジ科の魚である。他は *ngawaro* が *kore mie* にとれるのを除き、年間を通して漁獲できるものである。また、10月と11月で総漁獲に230尾ほどの差があるのは、11月になって *ngawaro* がとれるようになったこと、依然として *leanga* の漁があったことなどによるものである。

*eanga* が総漁獲数の74%を占めているが、「*kore sara* には *leanga* しかとれない」という村人の話をほぼ裏付けている。とりわけ、表中の *Ha* が10~11月を通じて185尾とっているのが目立っている。これは、*Ha* が *leanga* を燻製魚にして *Soasio* の市場で売るためにより多くとっているからである。燻製魚は体長 20 cm 程度のもので、6~7尾で100ルピア (70円) ぐらいで売れるという。*Ha* は200尾程度売るといふ。

しかし、*Ha* のように市場で売るとはむしろこの村では例外的で、そのほとんどは自家用として村内で消費される。なお、魚の料理法についてはすでに石毛が報告している [石毛 1978]。

次に出漁に際して、どのような漁法をおこなったかをみてみよう。表2によると釣

表3 出漁回数と一日当りの漁獲量

10/16日		17		18		19		20		21		22		個人名	11/20日		21		22		23		24		25		26			
A	M	A	M	A	M	A	M	A	M	A	M	A	M		A	M	A	M	A	M	A	M	A	M	A	M	A	M	A	M
○	○			○	○		×	○		○	×	○	○	Ab	○	○	○	×			○	○							○	×
2	1				12		3	3			1	55	10		24	13	13	3			10	12							29	2
			×		○			○	×	○		○		Mo			○	×							○	○	○			
								4	3	30		13					8	3							10	19	5			
○	○		×		○							○	○	Ja	○	○					○	×			○	△	○	○		
	1				2							13	41		25	1					16	8					85	43	9	
			○		○		○		○		○		○	Ha		○		○	○	○		○	○	○						○
			1		2		3		2		19		47		15			14	16		29		33							24
○			○	○	○		○	○		○	○	○	○	Sa			○	○								○	×			
2			1	1	4		3	21				18	11				7	19								41	2			
			○	○	○			○		○	○	○	○	Al			○	×	○					○	○	△				
				2	1			1		15	14	18					4	8	17						18	19	60			

○ 釣り漁  
 × 突き漁  
 △ 網漁  
 実数は1回の漁獲量

り漁、突刺し漁、網漁の3種類がおこなわれたが、登場回数はそれぞれ20回、11回、2回である。この場合の釣り漁はすべて手釣りでおこなわれた。また、網漁もすべて叉手網漁である。いずれにしても釣り漁の回数がもっとも多い。

さて、表3は10～11月における1日単位の出漁回数、漁獲量をみたものである。村人は1日に2回出漁することが多い。そこで表では1日を午前(AM)と午後(PM)にわけた。それぞれの時間の幅は、午前は6～10時、午後は5～8時とした。しかし実際に出漁していた時間は6人のなかでも一定しないので、上記の時間の幅は、もっとも早い時間と遅い時間の幅で設定した。

まず出漁回数をみると、10月と11月の14日間での6人の出漁回数は86回であった。そのうち釣り漁が73回、突刺し漁が11回、網漁が2回である。1日に2回漁に出るのを出漁機会数と考えるならば、14日間の期間中に28回の機会があったことになる。これに人数分をかけた168回が6人の出漁機会の総数となる。そして出漁しなかったときがあるので、その分を差し引いた86回が上述の総出漁数の具体的内容である。これを1人当たりでみると、約14回となり、ほぼ1日おきに出漁する計算となる。しかし、これはあくまでも平均値であり、実際には1～2日ぐらゐの間隔で出漁している。次に出漁回数と実際にとれた回数をみると、86回の出漁のうち72回に漁獲があり、漁のなかったのが14回であった。これはかなり高い漁獲率を示しているが、実際には村人自身、漁獲の有無にそれほどこだわる気配はなく、とれなければ他の人から分けてもらったり、あるいは物々交換したりして間に合せている。

さてとれた魚の分配であるが、これは叉手網漁を除きほとんどの場合が単独での漁であるため、特別に分配するといったことはない。ただ、他の者から漁具を借りて出漁した時とか叉手網漁のように共同作業などでは分配がおこなわれる。

まず、漁具の貸借について触れていこう。出漁に際して漁具を借りている例は8例あった。そのうち舟を借りているのが5例、突刺し具が1例、釣り針が2例である。(その他舟をつくるのに必要な道具を借りている例が7例ある。)何らかのかたちで人から物を借りているこれら15例のうち、血縁関係にあるのは2例にすぎず(父の兄弟の子および自分の兄弟の2例)、他は隣人か友達から借りている。たとえば舟を借りている例でみると、一例はとれた魚(40尾)のうち15尾を借りた相手にあげた。他の一例も同じように25尾のうち10尾をあげていた。村人によれば、借りた相手にはとれたものの3分の1をあげるという。ただし、漁のないときは特に何もせず、とれたときにあげる。これは厳密な意味での分配というより返済的な意味が強い。

他方、叉手網漁の場合には一緒に乗り組んだ者同士で均等に分け合う。たとえば、

前述した Lelei 岬にまで出漁した例をみると、その期間中にとれた10,000尾の *ngawaro* を乗り組んだ5人でそれぞれ2,000尾ずつ等分した。この場合、子どもも一人分としてもらった。もし、網の所有者とか舟の所有者が別にいれば持ち主を含めた人数で等分するという。このように、共同作業のときには等分にわけることが前提となっている。筆者も Limau 村の沿岸でおこなわれた叉手網漁の舟に同乗したが、そのときとれた魚の半分(20尾)をあとで分けられた。そのとき乗り組んだのは筆者も含めて6人であったが、すべて家族員であったために頭割の人数に入れず、結局、筆者と等分したわけである。

最後に、漁獲物をどのように消費しているかについてであるが、村に持ち帰って自家用の食料にする分を除き他はすべて売り尽くす。たとえば、Lelei 岬にいた間はスラヴェシから買い求めにやってきた人に売ったり、野営地の近くの村人に売ったりした。また、村に帰る途中にも Soasio の市場で売ったりする。しかし、漁獲物を他地域で売ったりするのは、叉手網漁や *leanga* の一部に限られており、大部分は自家用として村内で消費されている。

#### 6) 漁具の悉皆調査より

表4は、調査当時 Limau 村の人びとが漁具をどれだけ所有しているのかを各世帯別にみたものである。世帯番号のうちカッコ内は、それぞれ同一番号の世帯の同居人を示したものである。

まず、漁具を全くもっていない世帯が6例ある。このうち5例(No. 13, 14, 16, 21, 22の世帯)は若干の狩猟活動のほかは、サゴ澱粉の製造、バナナ、ヤムイモなどの採集に依存しており、漁撈活動はほとんどおこなっていない。ただし、この狩猟活動も漁業と同じく、生業活動のなかでは副次的なものである。漁具のうちもっとも多いのが釣り具(釣り針、ナイロン糸、釣り竿)で29世帯が持っている。内訳をみると釣り針は29世帯、ナイロン糸は28世帯、釣り竿が9世帯となっている。これは漁具もっている34世帯の85%にあたる。突刺し具をみると21世帯であるが、内訳では、3本ヤス21世帯、弓・矢3世帯、1本ヤス1世帯、銚4世帯となり、突刺し具のほとんどが3本ヤスである。これは Limau 村での突刺し漁がほとんど3本ヤスを使っておこなわれているためである。網具については、15世帯を数えることができるが、そのうち網漁の中心である叉手網を所有しているのは8世帯である。しかし、それに必要な舟をもっているのは3世帯だけで他の5世帯は叉手網漁をおこなっていない。このことは、浮刺網をもっている3世帯についても同様で、日常の漁撈活動では釣り漁をおこない、こうした網具はあまり使わない。

表4 世帯別にみたカヌー・漁具の所有

カヌー・ 漁具 世帯 番号	カヌー						釣り具			突刺し具				網具				笠 具	沖 箱	水 中 メ ガ ネ	糸 巻 具	船 外 機
	型 式				附		7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
	1	2	3	4	5	6																
1	○				○	○	○	○		○	○											
2					○		○	○		○		○										
3							○	○														
4	○				○		○	○		○						○						
5					○		○	○		○												
6			○		○		○	○		○												
7		○			○		○	○													○	○
8	○				○		○	○		○											○	
9	○				○		○	○		○			○									
10					○		○	○														
11			○		○		○	○														
12	○				○		○	○		○						○						
13																						
14																						
15																○						
16																						
17				○	○		○	○		○		○									○	○
18	○	○			○	○	○	○		○											○	
19	○	○			○	○	○	○		○											○	
20	○				○	○	○	○		○						○					○	
21	○			○	○	○	○	○										○			○	
22																						
23	○				○	○	○	○		○											○	
24	○				○	○	○	○													○	
25	○				○	○	○	○														
26	○			○	○	○	○	○														
27	○				○	○	○	○		○												
28	○				○	○	○	○		○												
29	○				○	○	○	○		○											○	
30																						
31	○	○			○		○	○		○						○						
32							○	○		○												
33							○	○		○			○									
34	○				○		○	○		○												
35	○	○			○		○	○		○						○					○	
36	○	○			○		○	○		○												
37	○	○			○		○	○		○												
38	○				○		○	○		○												
39	○			○	○	○	○	○								○					○	
40																						
(41)	○				○		○	○														
41																						
(41)				○	○																	

注1 カヌーと漁具のガレラ名は次のとおりである。

- |                  |                     |                    |
|------------------|---------------------|--------------------|
| 1. awa           | 9. totohe (釣り竿)     | 17. soma bodo (刺網) |
| 2. bolotu        | 10. dodofa (3本ヤス)   | 18. igi (笠)        |
| 3. pakata        | 11. ngangami (弓・矢)  | 19. sauba (沖箱)     |
| 4. pelang        | 12. jau (1本ヤス)      | 20. cermin (水中メガネ) |
| 5. sari (櫂)      | 13. titiala (鋸)     | 21. balam (糸巻具)    |
| 6. side (帆)      | 14. siu (叉手網)       | 22. motor (船外機)    |
| 7. gumara (釣り針)  | 15. gogeleba (すくい網) |                    |
| 8. nilon (ナイロン糸) | 16. salapa (すくい網)   |                    |

注2 世帯番号中(40),(41)はそれぞれ同居人を示す。

注3 横軸計は世帯別所有漁具数を示す。

注4 ○印は、該当漁具の所有の有無を示したもので、所有実数とは別である。



以上のように、漁具の種類としては4種類ほどあるが、そのほとんどが釣り具と突刺し具であり、それらはLimau村の漁撈活動を特色づけている釣り漁、突刺し漁の漁法と対応している。

ここで、村の主要な漁法である釣り漁について、それに使われる漁具からみてみよう。表4でもみたように、釣り具のうちでも実質的には釣り針とナイロン糸が主要漁具であり、釣り竿はあまり使われることはない。

釣り針とナイロン糸には、それぞれの大きさと太さに相関した組合せがある。表5は両者の組合せをムラ人の説明した例と、実際の漁で使われた例とを比較したものである。表中のプラスは両者の理想的な組合せを、マイナスは実際に使用された組合せを示している。また○はいわば理想と現実が一致した例である。ナイロン糸(N欄)は

数字が大きくなるほど太くなる。一方、釣り針(G欄)は数字が若いほど大きくなる(20号釣り針は長さ1cm、一番大きい1号が長さ9.5cmである)。表によれば、まず理想的な組合せは大体3つのグループに分けられる。第一は釣り針の20~14号とナイロン糸の10~25号が組み合わさったグループ、第二は13~9号と25~60号、第三は8~1号と70~100号である。それらはいずれも大きさと太さに比例している。そしていうまでもなく、こうした両者の組合せは漁獲する魚の大きさとも関係している。たとえば、leangaの場合、15~18号の針と15~25号のナイロン糸との組合せがよいとされている。これは実際の使用例とも一致している。しかし、全体的にみると一致していない例もかなりある。これは、村人自身が必ずしもそうした組合せに執着せず、ありあわせのものを使っているからである。ところが、釣り針に関する限り、それとは全く反対に村人は慎重に選んでいる。つまり、多少糸が細かったり太かったりしても、魚

表5 釣り針とナイロン糸の組み合わせ

G	N											
	10号	15	20	25	30	40	50	60	70	80	90	100
20号	-	+	-	-								
19			+									
18	○	+	○	+	-							
17	○	+	+	+	-							
16	○	+	○	+	-	-	-					-
15	○	○	○	○	-	-						-
14	○	+	○	+	-	-	-					-
13	○		-	-	-	-						-
12	+		○	-	○							-
11	○	-	-	-	○	-	-					-
10	○	-	-	○	○	+	-	-				-
9		+	+			+	+					-
8			-	-	+	○	○					-
7	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	-
6				-		+	○	+				+
5							+					+
4			+			+	+				+	+
3							+					+
2							+					+
1							+					+

注1 N=nylon (ナイロン糸)  
G=gumara (釣り針)  
注2 +=理想的な組み合わせ例  
-=実際の使用例  
○=+-が一致している例  
注3 号は、糸の太さ、針の大きさを示す単位

表6 サイズ別にみた釣り針とナイロン糸の実数

サイズ	釣り針	サイズ	ナイロン糸
1号	0	10号	0
2	2	15	5
3	1	20	3
4	1	25	15
5	1	30	7
6	2	40	11
7	5	50	1
8	3	60	4
9	6	70	2
10	5	80	0
11	4	90	1
12	5	100	0
13	5		
14	7		
15	9		
16	5		
17	2		
18	3		
19	0		
20	4		
	70		51

(不明の9例を除く)

(不明の4例を除く)

をとるのにさほど影響しないが、釣り針だけは村人のいうように「魚の口の大きさに合わせなければならない」からである。このことは、表5からもみてとれる。たとえば、釣り針では5号以上の大きさのものを実際に使っている例はない。つまり、5号以上の釣り針は、サメ類などかなり大きな魚をとるときに使用されるものであり、Limau村でふつうとれるような20~30cmくらいの魚なら、10号以下のもので間に合う。なによりも5号以上の釣り針では、そうした魚の口にははまらない。このように、ナイロン糸との組合せは別にしても、釣り針自身はそれほど無造作に使っているわけではな

い。表6は、村人のもっている釣り針とナイロン糸をサイズ別にみたものである。それによると、釣り針の場合6号以上のものが65点、とりわけ10~18号の総数は45点である。他方、ナイロン糸は10号から30号の総数が30点で全体の60%を占めている。これは10~18号の釣り針と10~30号のナイロン糸の組合せとして考えることができる。その組合せは、leangaをとる場合の組合せにほぼ近似している。

なお、Limau村にナイロン糸が入ったのは1974年であった。それまでは *ma ngumi* とよばれる木の皮の繊維を使ったという。かつては、*bi awa* [*Maranta dichotama* WALL.] という竹に似た木の外皮の繊維で糸をつくっていた。しかし、この *bi awa* では1度の漁でせいぜい2回しか使えなかった。その点、ナイロン糸は何回でもつかえるため、現在 *bi awa* を使用している者はいない。

このように、漁具の悉皆調査の資料からその実態を説明してきた。そして、漁具からみた限りでも、Limau村の漁撈活動が、釣り漁を中心として展開していることがわかった。

## Ⅱ. カヌー

### 1. Limau 村のカヌーの構造

村にあるカヌーは浮木が船体の両舷につけられたもので、いわゆるダブル・アウトリigger付きのカヌーである(写真14~18)。浮木と船体をつなぐ横木は2本ついている。これは、ハルマヘラ、ボルネオ、スラヴェシ、セラムの各島北部を結ぶ線上より以南の地域に特徴的にみられる形式である [HADDON & HORNELL 1938: 22]。Haddon によれば、横木と浮木の装着法には direct attachments (直接装着) と indirect attachments (間接装着) がある。そして横木と浮木の連結部は、㊤ 紐で縛りつ

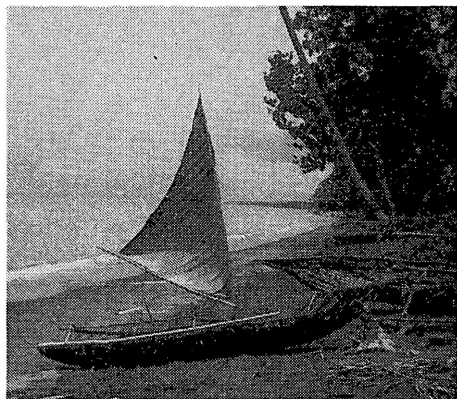


写真14 awa 型 (Limau 村)  
1~2人乗り用で Limau 村でもっとも多い種類。



写真15 bolotu 型 (Limau 村)

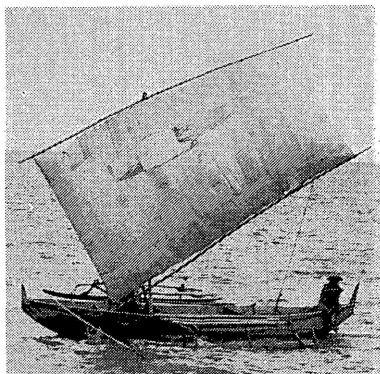


写真16 pakata 型 (Limau 村)  
叉手網漁、航海用につかわれる。

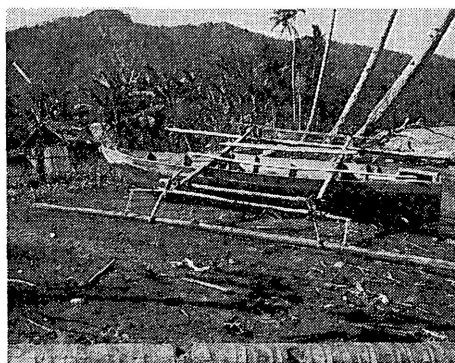


写真17 lepa-lepa 型 (Soasio)  
Kau (ハルマヘラ中部) にみられるタイプで Galela 族にはない。

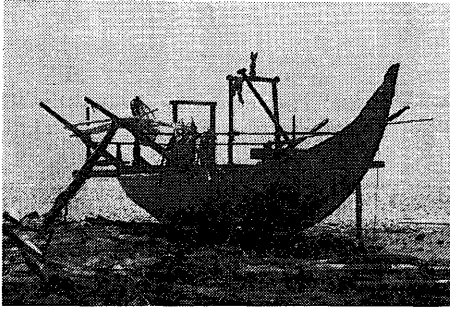


写真18 rorehe 型 (Lalonga 村)  
Tidore (ハルマヘラ島西海岸) のタイプで Galela 族にはない。

けられたタイプ (lashed connectives) と ③横木の先端部を直接、浮木に差し込むタイプ (inserted connectives) に分類される [HADDON & HORNEILL 1938: 25]。direct attachments が横木と浮木を直接連結させているのに対し、indirect attachments は両者の間に助材を用いているのが特徴的である (図9-1)。これらの分類にし

たがうなら、Limau 村のカヌーは indirect attachments 方式のうちの④のタイプである。

この④のタイプにみられる連結法には、逆 T 字型、肘型、柳枝型があるが、これを Limau 村の例にあてはめると肘型連結 (elbow connectives) になる (図9-2)。肘型連結は、ハルマヘラ型ともよばれ湾曲した、もしくは直角に屈曲した大枝で横木と浮木を連結させる方法である [HADDON & HORNEILL 1938: 9]。図9-2によるなら、Limau 村のカヌーのうち *awa*, *bolotu* は c タイプ、*pakata* は a タイプにあたる。以下では、村のカヌーの特徴について述べていこう。

すでに触れたように、村人が日常利用しているのは *awa*, *bolotu*, *pakata* の3種類で

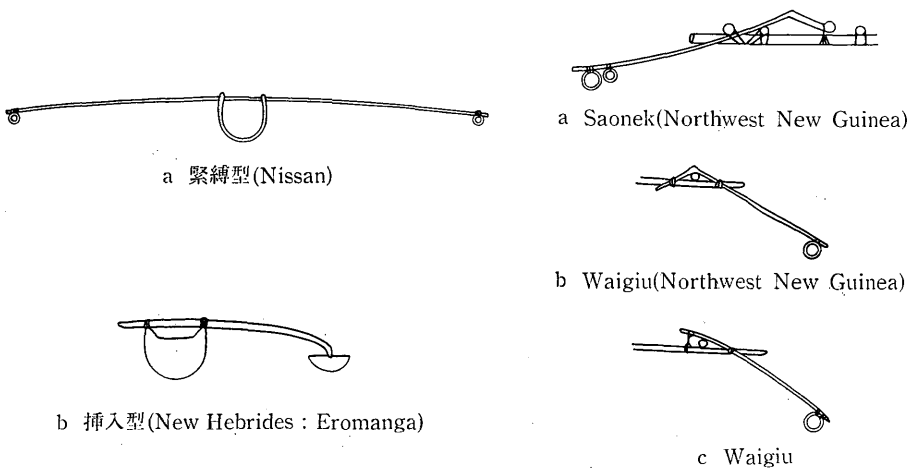
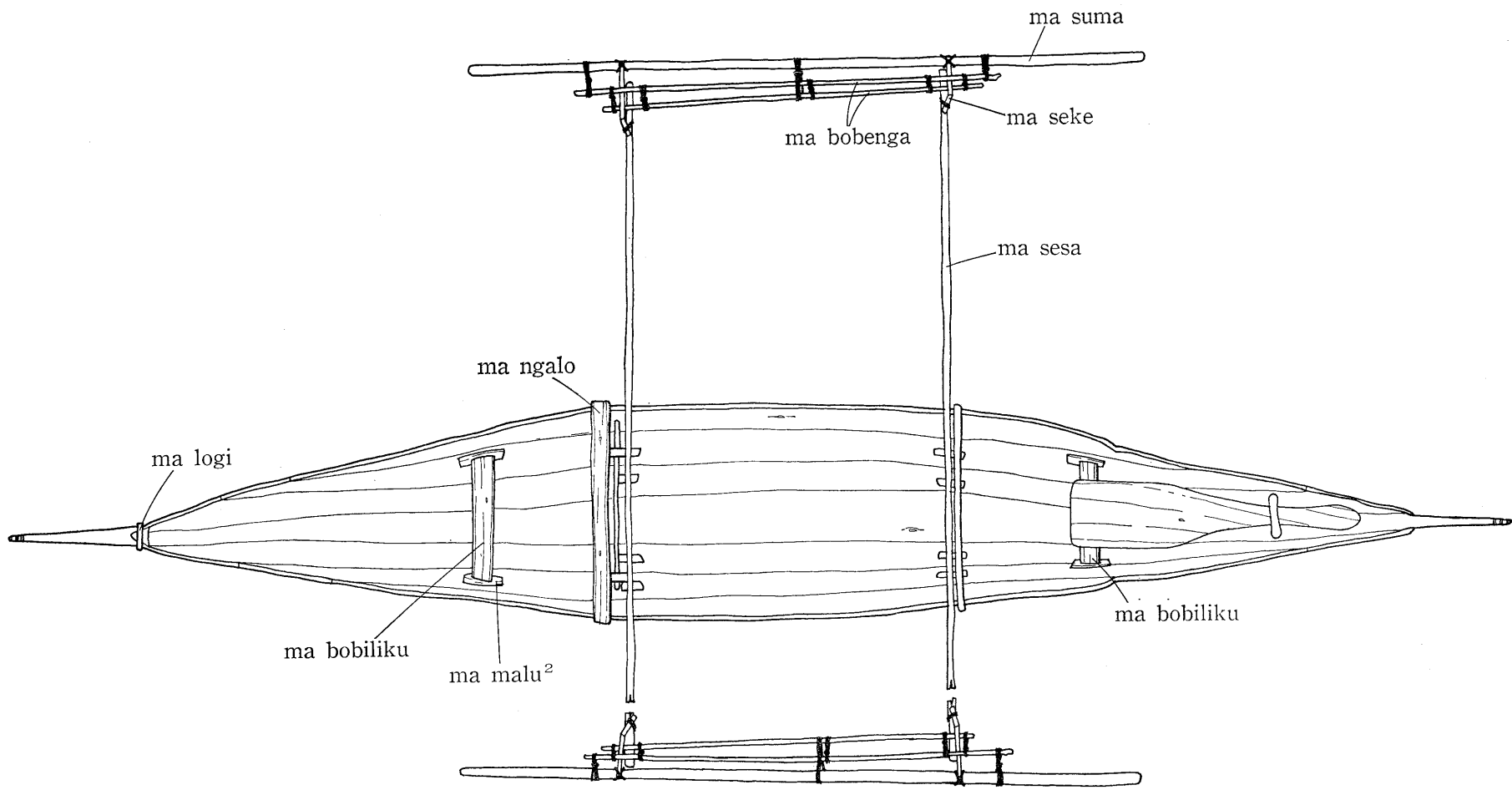


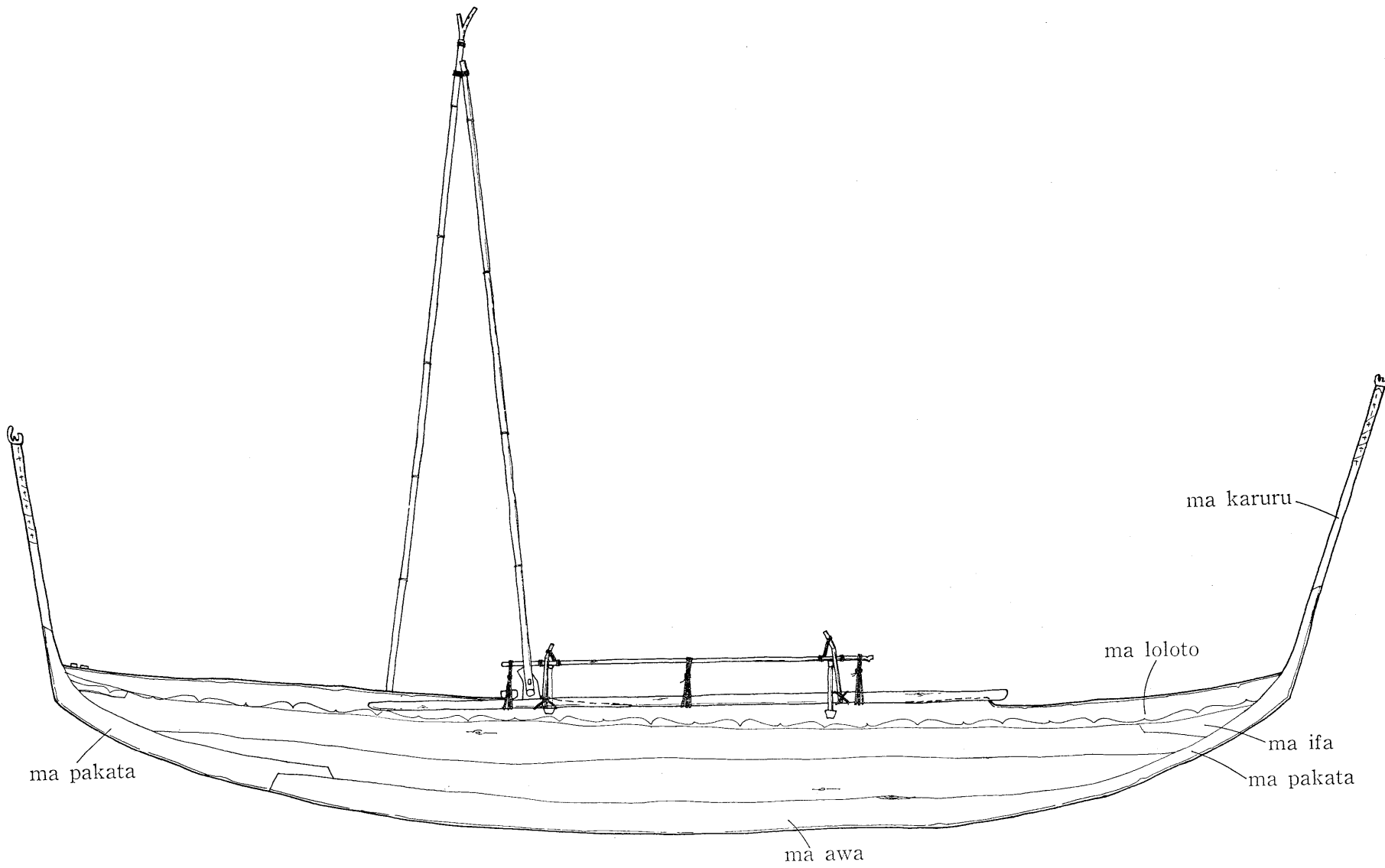
図9-1 直接装着

図9-2 間接装着 (肘型連結)

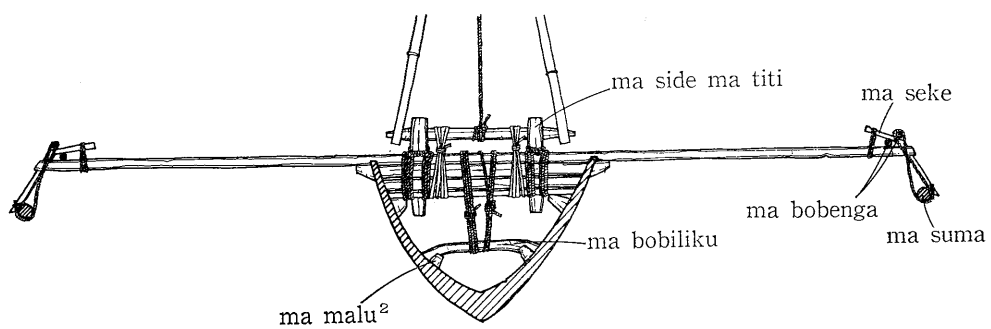
注 Haddon & Hornell の原図より作成 [HADDON & HORNEILL 1938: 26, 35]。



(平面図)



(側面図)



(正面図)

0 1M

ある。これらのカヌーは個々の部分名称については全く同じであるが、構造的には *pakata* が板張り船であるのに対し、他の2種類は丸木船である。図10は *pakata* の平面図、側面図、正面図を示したものである。

*pakata* は竜骨 *ma awa* と助材 *ma pakata* をまず組み立てて骨組みにしなが、その上に板を張り合せて作りあげられる (図10)。竜骨部分の材質には *bolawaro* とよばれる木が、また助材には *gofasa* [*Vitex sp.*] の木を使うが、いずれも高さ20m以上になる大木である。船首 *dina* と船尾 *dai* には *ma karuru* とよぶ十字架をあしらった木製の装飾棒がつけられている。また左右の舷側に張り合わされた板の一番上には、波形をほどこした刻目 *ma loloto* がある。船首の最先端部には、叉手網漁のとき網を広げるために使われる2本の竹の底部を支え、テコがわりに使うように工夫された小さな横板 *ma logi* が取り付けられている。船の中央からやや前よりには帆の取付け部

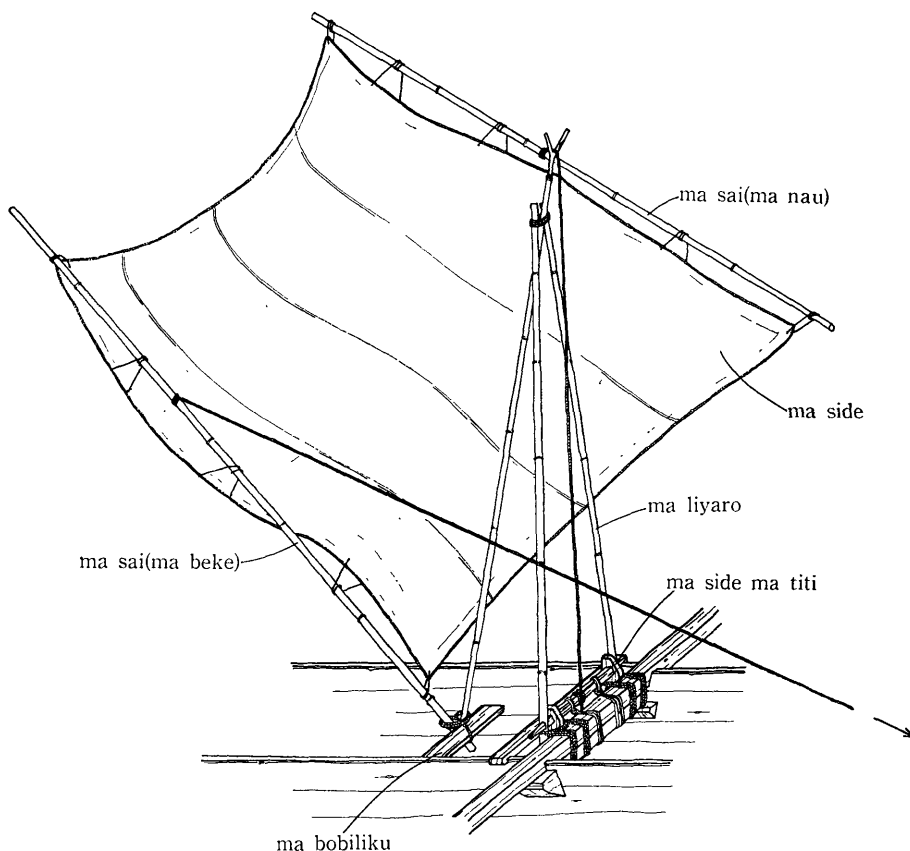


図11 帆の取付部 (pakata 型カヌー)

*side ma titi* がある (図10, 図11)。帆を張るときには、5 m ぐらいの長さの3本の竹を円錐形に立てる。そのうち2本の竹を *side ma titi* の連結部にあいている穴に差し込む。他の1本は船首に近い船腹につけられた小割板 *ma ngalo* にくくりつけ固定させる。この3本の竹は頂点で結び、1本の竹の先端にY字形の棒が挿入される。このY字棒が帆の上げ下げのときに滑車の役割を果たしている。

帆 *ma side* は縦2 m, 横4 m ほどの布地で作られている。かつてはパンダナスの葉をサトウキビの繊維でつくった糸で縫い合わせたという。村人は、それ以前までは櫂 *sari* しか使わなかったと説明したが、おそらくそれは *pakata* とは別の、たとえば後述するような航海用の舟のことではないかと思われる。帆を張るのに使っている2本の竹 *side ma sai* にはそれぞれ男竹 *ma nau*, 女竹 *ma beke* の名称がついているが、その意味は明らかではない。なお、帆と2本の竹は細いココナッツ・ロープで結んでいる。

*pakata* の内部には *maru*<sup>2</sup> とよばれる横板 *ma ngalo* を支えるための突出部が3カ所につけられている。船尾と船首の部分には *ma ifa* とよぶ板材が使用されるが、これは水もれ防止もかねた役目を果たしている。

アウトリigger部分を見ると、2本の横木 *ma sesa* と浮木 *ma suma* からなってい

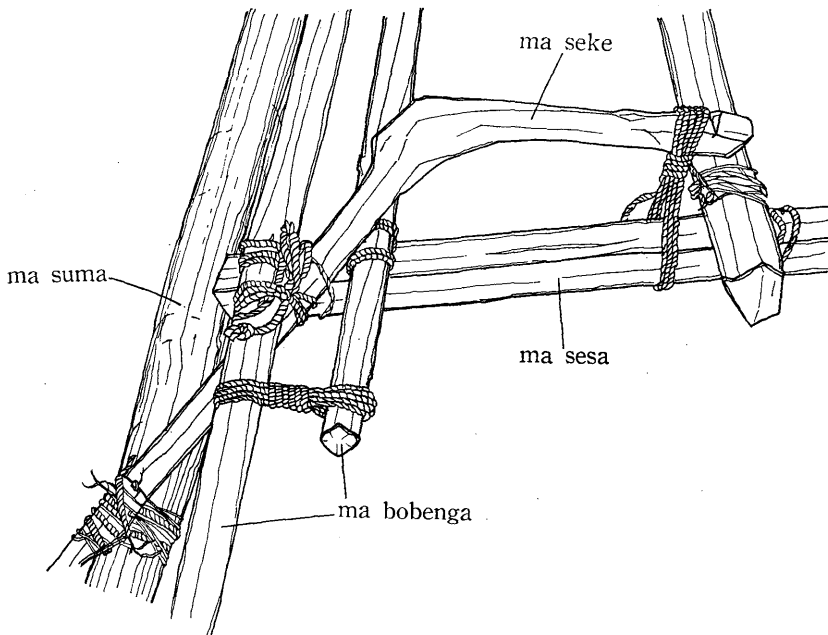


図12 横木と浮木の連結部 (pakata 型カヌー)

る。この横木と浮木を連結しているのが *ma seke* というほぼ直角に屈曲した翼桁がつけられている。この翼桁をはさむようにして2本の縦材 *ma bobenga* を通し補強している(図12)。船を漕ぐとき用いられる櫂も他のカヌーの場合にくらべ二回りぐらい大きいものを使

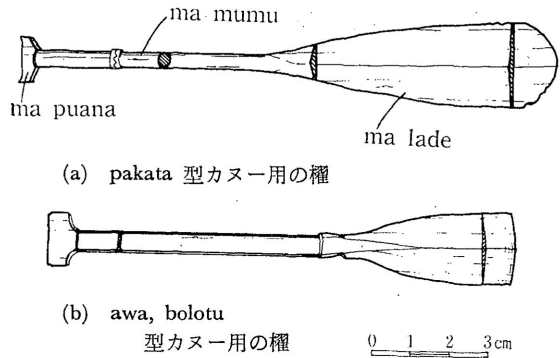


図13 櫂 sari

っている(図13)。櫂に装飾がほどこされることはなく、単純な刻み目をつける程度である。櫂は柄 *mata puara*、幹 *ma mumu*、平板 *ma lade* などの名称がついている。もっぱら *gofasa* などの堅い木を山刀で削ってつくるが、大体2~3日で仕上げる。

*pakata* は全長7.5 m、幅1.2 m、アウトリガーの横木の長さは5 mほどある。村人によれば、移住するときなどはこれに家族全員が乗り組み何日も航海するという。村ではこの船をつくる人がいないので、隣接の *Lalonga* 村の人に頼む(写真19)。大体、新造船で1隻が34,000ルピア(約24,800円)かかる。

一方、*awa, bolotu* は *pakata* とちがい丸木舟であるため、一本の木をくりぬいてつくり、しかもほとんど所有者自身が製作する。構造的にも、たとえば *pakata* のように縦材を使用しないか、あるいは一本だけである。横木と浮木の連結部には同じ *ma*

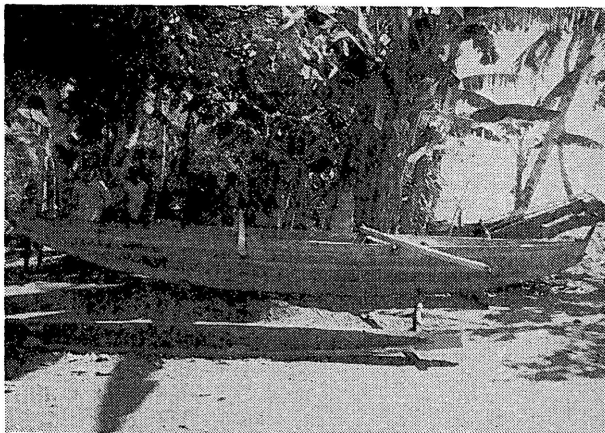


写真19 建造中の pakata 型カヌー (Lalonga 村)



sekeを使う。awaの全長は4.7m, bolotuが5.6mでいずれも1~4人乗り用の小舟である。

2. 伝統的カヌー：juanga

村人によれば、かつて（イスラム教の渡来以前）Galela族はjuangaとよばれた大きな船をもっていたという。それは別名kora koraともよびスルタン（王候）が旅をするときに使われた。また戦争のときスルタンが外征hongiするための戦船としても使ったといわれる。船首は鳥の頭namo ma saheを、船尾は鳥の尾namo ma pegoをかたどった全長12mぐらいの20~100人乗りの漕船であった。また、船の中央部には三角形の黄色い大きなスルタン旗pajilamoをかかげ、船首と船尾にはkoimurao（テルナーテ語）とよばれる同じく三角形の三色旗を1本ずつたてた。この三色旗はオランダが来る以前は、黒・白・黒の三色でスルタン旗であると同時に船旗ともなっていた。その後オランダが来て以来、長方形の三色旗に変わった。色も赤・白（オランダ）と黒（インドネシア）になった。ちなみに、この船にはアウトリiggerはつかず、すべて櫂でこいだと伝えられる。航海中は、船首には見張役sido do ulu、船尾には船長palihemaが立つ。juangaの最後の一隻が35年ほど前にSoasioで壊れて以後、全く姿を消したという。

3. カヌーの種類と使い分け

表7は、Limau村でのカヌーを名称別にその実数と経年（造ってから経過した年数）、製作に使った木の種類を示したものである。それによればカヌーの総数は33隻

表7 カヌーの名称・実数・経年・使用材

カヌーの名称	実数	経年（単位：年）					使用材									
		0-1	1-5末	5-10末	10-	不明	A	B	C	D	E	F	G	H	I	不明
awa	23	2	14	1	2	4	4	4	1	1	1	1	1	1	1	8
bolotu	6	3	2			1			3						1	2
pakata	3	1				2							1			2
(pelang)	1					1										1

A~Iの使用材のガレラ語名称〔学名〕

- A. jajame [*Dolichandorne spathacea* (K. SCHUM.)]
- B. niha [*Canarium commune* (LINNÉ)]
- C. laba
- D. toku [*Lepiniopsis ternatensis* VAL.]

- E. ngusu [*Terminalia cattapa* (LINNÉ)]
- F. gofasa [*Vitex sp.*]
- G. bolawaro
- H. tuhu [*Gemelina moluccana* (BACKER)]
- I. kananga [*Canagium odoratum* (BAILLÉ)]

であり、うち *awa* が23隻と最も多く、次いで *bolotu* の6隻、*pakata* の3隻となっている。*pelang* をカッコ内としたのは、北スラヴェシ (Sangir) のもので Limau 村固有の型式とは異なるためである。33隻のカヌーを世帯別にみると、1世帯で2隻を所有している場合があるので、Limau 村の全世帯中、25世帯 (同居者で所有している者がいるので、所有者数でいえば27名となる。) がカヌーを所有していることになる。

また、経年をみると、造ってから1～5年が最も多く半数を占めている。*awa* のなかには造ってから25年経ったという例

があったが、真偽のほどは明らかではない。村人によれば大体10年くらいが限界という。

カヌーに使用する木材は、その種類にかかわらずほとんどが高さ15～30m ぐらいの巨木で、山から切り出してくる。カヌーの製作は切り出した場所でおこない、完成後海づたいに村まで運んでくる。大きさにもよるが *awa*, *bolotu* クラスで1～2カ月、*pakata* で3～4カ月かかるという (写真20)。造るのに使用する道具は大きな山刀 *pela*、ちょうな *patu patu*、のこぎり *garagaji*、斧 *basu*、やりがんな *suga suga* などであるが、村人の大半は山刀、斧ぐらいしか持っておらず、必要なときにはそれらを所有している他の者から借りている。

カヌーの使い分けをみると、漁撈活動と交易活動に分けられる。まず漁撈活動についていえば、すでに指摘したように *awa*, *bolotu*, (*pelang*) は主として釣り魚、突刺し漁、浮刺網漁に使われ、*pakata* は叉手網漁専門に使われる。*awa*, *bolotu* タイプのカヌーが多いのは、ここでの漁法が釣り魚、突刺し漁が中心であることと関係している。

一方、村人の交易活動は、毎週木曜日に開かれる Soasio の朝市での買い出しであるが、若干の村人は燻製魚、コプラ、アタップ *katu* など売りに行く。この朝市に出かけるときには、かつてはカヌーを利用していたが、現在では、村民が共同購入した船外機付きの船を利用している。なお、船外機付きの船を個人で所有している村人が1人いる。漁撈活動ではほとんど使用しないが、Tobelo (ハルマヘラ島中部) な



写真20 荒けずりの段階の *awa* 型カヌー (Limau 村)

ど遠方の町に行くときに使っている。

その他、遠く離れたところにある自分の畑に行くときや、木を切り出しに行くときなどにカヌーが使われることが多い。

発達したサンゴ礁もなく、海藻類や貝類の採集活動をほとんどおこなわない村人にとって、漁撈活動はカヌーを使うことを前提としなければならない。したがって、一般的にはカヌーの使われ方もそうした漁撈活動に比重が置かれることになる。

## おわりに

Limau 村での漁撈活動は、生業活動全体のなかでみるなら、あくまで「おかずとり」としてのものであった。その意味では副次的なものといえる。つまり、村人の日々の基本的な食糧源は農業活動から得られる生産物であり、魚はあくまで副食にすぎないということである。したがって漁撈活動も、その日のおかずとしての漁獲があればよいわけで、必要な漁具も釣り糸 *nilon*、釣り針 *gumala*、舟 *deru* があれば十分なのである。これは、村人のなかで若干の人が網やその他の漁具を多く持ちながら、かれら自身も結局、日常の漁撈活動ではそうした漁具を使うことはなく、手釣り漁で間に合わせていることからもうかがえる。たとえば、漁法にしても罟漁とか建干簀漁など、移住者によってもたらされた漁法もあるが、結局この村に定着しえなかった。これは、そうした漁具の工夫なり新しい漁法の導入などを積極的におこなう背景や地理的環境が、この村にないことにもよろう。

以上、ハルマヘラ島北部の一小村の漁撈活動について触れてきた。冒頭でも触れたようにこの報告は滞在中に得た資料の提出を目的としたものであった。もとより、漁撈活動に関する分析は当該社会の構造的特質などのより広範囲な視野のなかで把握、他地域との比較研究が必要である。この点に関しては、筆者自身の資料のなかには、まだ未整理のものも若干あり、それも含めた比較検討が今後に残された問題である。

## 謝辞

本報告の執筆にあたって実に多くの方々にお世話になった。なによりも、調査期間中労を惜しまず御協力いただいた Limau 村の Abubakar 氏、Ali 氏、Habu 氏には貴重な話を聞かせていただいた。その他、ここではいちいちお名前をあげ得ないが、多くの村の方々の御協力もいただいた。筆者らと共に調査に参加された Pattimura 大学の Z. A. Soukotta 氏には多くの御協力をあおいだ。ここに記して感謝の意を表したい。さらに資料の整理の段階で御助言をいただいた倉田享先生（近畿大学農学部助教授）、魚の同定に関して貴重な資料を送ってくださるとも

に御教授いただいた岩切成郎先生（鹿児島大学水産学部教授）および秋道智彌氏（国立民族学博物館助手）にも心よりお礼申しあげる。

また、崎山理先生（広島大学文学部助教授）には有益な文献を紹介していただいた。オランダ語文献の翻訳に関しては大越公平氏（明治大学大学院）に協力を得た。末筆ながら、調査期間中はもとより帰国後の研究会を通じてつねに有益なコメントをしていただいた石毛直道隊長をはじめ、佐々木高明教授、和田裕一教授、松澤員子助教授、吉田集而助手の諸氏にはもっともお世話になった。ここに厚くお礼申しあげたい。

## 文 献

- 秋道智彌  
1976 「漁撈活動と魚の生態——ソロモン諸島マライタ島の事例——」『季刊人類学』7(2):76-128 講談社。  
1977 「伝統的漁撈における技能の研究——下北半島・大間のババガレイ漁——」『国立民族学博物館研究報告』2(4):702-764。
- 阿部宗明  
1976 『原色魚類検索図鑑』北隆館。
- 赤井正夫・穂積俊一  
1972 『インドネシアの水産業』（海外水産叢書17）日本水産資源保護協会。
- BAARDA, M. J. van  
1895 *Woordenlijst. Galelareesch-Hollandsch. Met ethnologische aantekeningen, op de woorden, die daartoe aanleiding gaven.* 's-Gravenhage, Martinus Nijhoff.
- 江川俊治  
1921 『ハルマヘラ島生活』。
- EDWIN, M. Loeb  
1974 *SUMATRA, its history and people.* Oxford University Press.
- HADDON, A. C. & HORNELL, J.  
1936-38 *Canoes of Oceania*, Vol. 1-3. B. P. Bishop Museum Special Publication 27-29. Bishop Museum Press, Hawaii. (1975年に1~3号合併の再版が刊行された)
- 石毛直道  
1978 「ハルマヘラ島, Galela 族の食生活」『国立民族学博物館研究報告』3(2):159-270。
- 岩切成郎  
1972 「インドネシアの漁業開発と技術協力」『海外技術協力』No. 218: 31-38。  
1973 「東北スマトラの華僑水上部落の生態」『季刊人類学』4(2):186-201 講談社。
- KENNEDY, T. R.  
1953 *Field Notes on Indonesia: South Celebes, 1949-50.* HRAF Press, New Haven.  
1955a *Field Notes on Indonesia: Flores, 1949-50.* HRAF Press, New Haven.  
1955b *Field Notes on Indonesia: Ambon and Ceram, 1949-50.* HRAF Press, New Haven.
- Koentjaraningrat (ed.)  
1967 *Villages in Indonesia.* Cornell University Press.
- 大林太良編  
1975 『日本古代文化の探究・船』社会思想社。
- 須藤利一編  
1974 『ものと人間の文化史・船』法政大学出版局。
- 藪内芳彦著  
1977 『東南アジアの漂海民』古今書院。
- 藪内芳彦編著  
1978 『漁撈文化人類学の基本的文献資料とその補説的研究』風間書房。